



Title	菅原道真の白色好尚と日本の美意識：白い花を詠む詩を通して
Author(s)	高, 兵兵
Citation	詞林. 2006, 39, p. 24-38
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67547">https://doi.org/10.18910/67547</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 菅原道真の白色好尚と日本の美意識

— 白い花を詠む詩を通して —

高 兵 兵

## 一 問題提起

日本において、古く『万葉集』の時代から白色を優位に考  
え、歌において白色のものを讃美する美意識が存在しており、  
そして『古今集』の時代になると、「白」は、和歌の見立て  
におけるもっとも大きな比重を占める要素となる。比喩する  
ものと比喩されるものを問わず、白いものであれば、各素材  
は互換的に使われる「白色の連環」という現象が見られる。  
例えば、次の、

いづれをか花とはわかむ長月の有明の月にまがふ白菊

〔貫之集〕一〇二・九月

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をとてよ  
める。

月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかり  
ける

〔古今集〕春上・四〇・躬恒

梅の花に雪の降れるをよめる  
花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにはへ人の知

るべく

〔同〕冬・三三五・小野篁

などの歌において、白菊と白梅という花の種類の違い、或いは月と雪の違いがあるものの、糸賀きみ江氏が指摘しているように、「花が如何なる種類であろうとあまり問題ではなくそれより、白いイメージの世界のものと考えたのではなからうか。：月と花に共通するのは、雪と花がそうであったように、白のイメージであろう」と考えられている。

筆者は以前、以上の『古今集』時代の和歌に見られる白いイメージの関連性と同じ現象は、菅原道真の詩にも存在している」と論じたことがある。

月夜見梅花<sub>二</sub>于<sub>レ</sub>時年十一、嚴君令<sub>二</sub>田進士<sub>二</sub>試<sub>レ</sub>之、

予始言<sub>レ</sub>詩、故載<sub>二</sub>篇首<sub>一</sub>

〔菅家文章〕卷一・二

月耀如晴雪

月の耀き 晴れたる雪の如し

梅花似照星

梅の花 照れる星に似たり

可憐金鏡轉

憐れむ可し 金鏡轉じ

庭上玉房馨

庭上玉房馨るを

右の詩では、「月↓雪」「梅↓星・玉」と、複数の比喩が用い

られてゐるが、「雪」・「玉」は白いモチーフである。そして梅花を「星」に喩えるのも、従来考えられた中国六朝の「菊賦」にある「黃蕊星羅」という菊を星に喩える表現から転用されたものではないと考える。それは、道真の「寄白菊」四十韻（『菅家文草』巻四・二六九）にある「地疑星隕宋、庭似雪封袁」と同様に、白菊と月光に照らされる白梅とがともに白く明るく、輝く星のようだという「白」の共通性から、自然に発想が及んだ比喩ではないかと思われる。一首は、天地間渾然一体の明るくて白いイメージを表しており、冒頭に挙げた和歌と発想が同じである。

道真の詩には、右に挙げた例のほかにも、比喩のモチーフとして、白いものが実に多く見られる。道真の詩における白いモチーフの多用は、『万葉集』・『古今集』と同様、日本における白色好尚の美意識の一脈として捉えて差し支えないであろう。

道真の白色好尚は、また、白い花を愛好する事実によって表れる。かつて幸田露伴が「公実に梅を愛す、又実に菊を愛す。：而して公の愛の特に白菊花に注げる、これ亦知るべし。」と述べたように、道真は、白菊をこよなく愛したことが分かる。道真は、菊だけではなく、梅、そして牡丹に関しても、白色をより好んでいる。そして、特に唐詩と比べれば、道真の白い花に対する愛好が一層顕著になる。本稿は、道真の白い花を詠んだ詩に現れる白色好尚の志向を明らかにし、

同時に中国詩との比較を行うことによって、道真の詩における白色好尚の志向は日本の美意識の具現であることを解明したい。

## 二 白梅と白牡丹

道真の詩には、梅の花を詠むものが少なくないが、中には、表現からそれが白梅を詠んでいると分かるものがいくつかある。まず、先にも挙げた道真が初めて詠んだ「月夜見梅花」の詩はそうであり、また、次の詩句では、

翫<sup>③</sup>梅華<sup>④</sup> 各分<sup>⑤</sup>二字<sup>⑥</sup> 探得勝字

（『菅家文草』巻一・一一）

梅樹花開剪<sup>⑦</sup>白繪<sup>⑧</sup>  
春情勾引得相仍<sup>⑨</sup>

梅樹花開きて 白繪を剪る<sup>⑩</sup>  
春情に勾引せられ 相ひ仍るを得たり

梅が「白繪（しらぎぬ）」の切れのようだと比喩されていることから、この詩も白梅を詠んだものと分かる。

そして、梅を詠む次の、

早春侍<sup>⑪</sup>宴<sup>⑫</sup>仁壽殿<sup>⑬</sup> 同賦<sup>⑭</sup>春雪映<sup>⑮</sup>早梅<sup>⑯</sup>應<sup>⑰</sup>製<sup>⑱</sup>

（『菅家文草』巻一・六八）

雪片花顔時一般<sup>⑲</sup>  
上番梅援待追歡<sup>⑳</sup>  
氷紬寸截輕粧混<sup>㉑</sup>  
玉屑添來軟色寬<sup>㉒</sup>

雪片花顔 時に一般なり  
上番梅援 追歡を待つ  
氷紬寸に截りて 輕粧混はり  
玉屑添へ來たりて 軟色寬なり

鶏舌纒因風力散  
鶴毛獨向夕陽寒  
明王若可分真偽  
願使宮人子細看

鶏舌 纒かに風力に因りて散るも  
鶴毛 獨り夕陽の寒きに向かふ  
明王若し真偽を分かつべくんば  
願はくは 宮人をして子細に看せしめよ

早春陪右丞相東齋同賦東風粧梅各分二字 探得迎字

裂素誰容勞少女

素を裂きて 誰か少女を勞めしむるを容さん

占巢莫怪妬初鶯

巢を占めて 初鶯を妬むを怪しむこと莫かれ

などの詩にある「氷紉寸截」や「裂素」も、先の「剪白繪」と同じく「しらぎぬの切れ」という意味であり、この二首も白梅を詠んだ詩だと分かる。一首目は、仁寿殿の梅を詠っているが、「鶴毛」はここでは白梅の比喩であり、そして尾聯で雪と紛らわしいことを詠んでいることから、この梅は白梅だと分かる。

特に注目したいのは、次の詩である。

早春侍宴同賦殿前梅花應製

非紅非紫綻春光  
天素從來奉玉皇

紅に非ず紫に非ず 春光に綻ぶ  
天素は從來 玉皇に奉る

これもまた先の「早春侍宴仁壽殿同賦春雪映早梅應製」(六

六)と同じように、殿前の梅花が詠まれているが、「紅でも紫でもない、白い梅の花こそ、常に「玉皇」の側に仕えるものだ」と詠っている。「玉皇」が天皇を指しているのは言うまでもない。波戸岡旭氏は、「梅の花は内宴の花として、天子に寵愛され、天子と共にあるべきものであり、且つそれは栄達の彼自身を意味する花として詠まれるべきものであった」と指摘しているが、右の詩から見れば、それが特に白梅について言えるものと考えられる。

「非紅非紫」という表現は、白居易の、

白牡丹 和錢學士作 『白氏文集』〇〇三二)

城中看花客

城中花を看る客

旦暮走營營

旦暮走ること營營たり

素華人不顧

素華 人顧みざるも

亦占牡丹名

亦牡丹の名を占む

閉在深寺中

深寺の中に閉ざされ

車馬無來聲

車馬來たる聲無し

唯有錢學士

唯だ錢學士のみ有りて

盡日遶叢行

盡日叢を遶りて行く

恰此皓然質

恰れむ此の皓然の質

無人自芳馨

人無くして自ら芳馨す

衆嫌我獨賞

衆嫌へど我獨り賞し

移植在中庭

移植えて中庭に在り

：

豈惟花獨爾

豈惟花獨り爾らんや

理與人事并

理は人事と并ぶ

君看入時者

君看よ 時に入る者

紫艷與紅英

紫艷と紅英と

という詩の結句を借用したものだと思われる。花の種類が異なるとは言え、道真是白居易の白牡丹詩の「紅・紫」を意図的に用いたと考えられる。ところが、両者の内容が違ふ。白居易の詩は、世間では紫や紅の牡丹を珍重とし、白牡丹が顧みられないことを批判する諷諭詩であるが、最後に「花だけでなく、世間の理屈は人事も同じだ。今の世中で恵まれているのは、やはり紫と紅だ」と詠んでいる。これに対して、道真の詩では、「紫や紅ではない白であるからこそ、天皇の側に仕える栄光が得られたのだ」と詠み、正面から白梅の高貴さを讃美している。

唐詩に白梅を詠む詩がないわけではない。それにも関わらず、道真是わざわざ白居易の白牡丹詩の表現を用いている。その意図は何であろう。ここで少し視点を変えて、唐の牡丹愛好の状況を見てみよう。

先の白居易の詩に「素華人不顧」とあったように、当時一般的には、白い牡丹が好まれず、詩中の「錢學士」のように白牡丹を愛好するのは、少数派である。白居易の詩だけでなく、次に挙げる詩からも同じ認識が窺える。

白牡丹 裴士淹（又作裴濟或盧綸詩）

〔全唐詩〕卷二二四

長安年少惜春殘

長安の年少 春の残れるを惜しみ

爭認慈恩紫牡丹

争ひて認む 慈恩の紫牡丹を

別有玉盤承露冷

別に玉盤露を承けて冷たき有るも

無人起就月中看

人の起きて月中に就きて看る無し

牡丹（一作成婚）

張又新

〔全唐詩〕卷四七九

牡丹一朶值千金

牡丹一朶 千金に値す

將謂從來色最深

將ちて從來色の最も深きを謂ふ

今日滿欄開似雪

今日欄に満ちて開きたるは雪に似たり

一生辜負看花心

一生 花を看る心に辜負す

一首目は、白居易の詩と同じ趣旨が見られ、世間の人は争って紫牡丹を見に行くのであり、月夜に咲く白牡丹を見る人がいないと詠んでいる。二首目は、「高い値を出したのは、その牡丹は色が深いと信じたからだ。しかし、いざ咲いたら真っ白のものであった。花を愛する気持は裏切られた」と詠んでいる。牡丹は、色が深いほど価値あるものと思われる。白居易の「秦中吟・買花」〔白氏文集〕〇〇八四〕にある次の詩句も同じ認識を詠んでいる。

一叢深色花

一叢深色の花

十戸中人賦

十戸中人の賦なり

以上の詩に詠まれたように、唐では、白い牡丹は赤や紫の牡丹に比べてあまり好まれないという風潮が確かに存在して

いた。白居易も、「白牡丹」において世相に対する反感を示したものの、実際は紅牡丹を詠んだ詩のほうが圧倒的に多く、「白牡丹」を詠んだのは、先の楽府と次の一首、合わせて二首のみである。

### 白牡丹

〔白氏文集〕〇八四八

白花冷澹無人愛  
亦占芳名道牡丹

白花冷澹にして 人の愛する無し  
亦芳名を占めて 牡丹と道ふ

應似東宮白贊善  
被人還喚作朝官

應に似るべし 東宮の白贊善  
人に還た朝官と喚作さるるに

しかも、右の一首は、白牡丹を讚美するものではなく、牡丹の「白」と姓の「白」を重ね合わせて、朝廷に冷遇された身の上を、誰にも愛されない白牡丹に比喩している。そこにあるのは自憐と自嘲という屈折した心理であり、白牡丹に対する愛情が見えない。さらに、楽府「牡丹芳」〔白氏文集〕〇一五二では、

牡丹芳 牡丹芳

牡丹芳し 牡丹芳し

黃金蕊綻紅玉房

黄金の蕊綻ぶ 紅玉の房

：

仙人琪樹白無色

仙人の琪樹 白くして色無し

王母桃花小不香

王母の桃花 小くして香ばしからず

宿露輕盈汎紫艷

宿露輕盈として 紫艷を汎べ

朝陽照耀生紅光

朝陽照耀して 紅光生ず

紅紫二色間深淺

紅紫の二色 深淺間はり

向背萬態隨低昂 向背の萬態 低昂に隨ふ

「仙人の玉樹といつても白くて色がない」と、白色のあじけないことを言い、そして「紅玉・紫艷・紅光・紅紫」と、紅や紫の牡丹への賛辞をたくさん列ねている。この詩は題注に「美天子憂農也」とあるように、世間の牡丹溺愛を諷諭する詩であるが、同時に紅牡丹の魅力も存分に伝えている。白居易自身も紅や紫の牡丹が嫌いではなかったらう。

以上唐の牡丹愛好の傾向を概観した。では、なぜ唐では紅と紫を好んで、白を嫌うのか。李樹桐氏は、『唐會要』「章服品」の、

貞觀四年八月十四日詔曰、：於是三品以上服紫、四品五品以上服緋、六品七品以緑、八品九品以青。

（卷三十一）

という記録を引用し、「当時紫や緋（赤・朱・紅）などが高級官僚の服色として好まれ、紫牡丹や紅牡丹は、富貴の象徴として愛好された。：白い服は平民が着るものである。平民は皆紫や赤の官服に憧れるので、白牡丹よりも紫と紅の牡丹を好んだのである。」と指摘している。李氏の説は首肯できる。先の白居易「白牡丹」(〇〇三二)詩にある「豈惟花獨爾、理與人事并」の、「人事」が指しているのは、この服色の差異による階級差別意識も含まれているだろう。

一方、日本では、『令集解』「喪服令」に、  
我朝以「白色」爲「貴色」、天皇服也。

（卷四〇）

という記述があるように、当時「白」は一番高貴の服色とされていた。

このように、日中において、白色に対する認識は正反對であった。道真は、唐の実情を熟知した上で、殿前の白梅に因んで、「非紅非紫綻春光、天素從來奉玉皇」を詠出したのではないか。

道真は、白牡丹を詠む詩も残している。讃岐で詠んだ次の一首である。

#### 法花寺白牡丹

〔菅家文章〕卷四・二五七

色即爲貞白

色即ち貞白爲るも

名猶喚牡丹

名猶牡丹と喚ぶ

嫌隨凡草種

嫌ふは 凡草に隨ひて種えらるること

好向法華看

好むは 法華に向かひて看ること

在地輕雲縮

地にありて 輕雲縮まり

非時小雪寒

時に非ずして 小雪寒し

繞叢作何念

叢を繞りて何の念か作す

清淨寫心肝

清淨心肝に寫そとぐ

第一、二句は、「色は眞つ白であっても、名前は牡丹と言う」という意であるが、これは明らかに先にあげた白居易の二首の「白牡丹」詩の「素華人顧、亦占牡丹名」「白花冷澹無人愛、亦占芳名道牡丹」を踏まえたものである。焼山廣志氏によれば、右の道真の詩は、地方に左遷された道真が、白居易の白牡丹詩を踏まえて、冷遇された白牡丹を身に重ね、憤

懣を訴えた作品とされる。しかし、道真の詩は、白居易の二首と異なっていて、「顧みる人がいない」という世間の白牡丹に対する偏見などには全く触れておらず、一首は率直に白牡丹を賛美する情が溢れている。この詩の白牡丹は、久保田淳氏が指摘したように、「働き盛りを讃岐守として地方生活を送った望郷の日々に道真の心を慰めた花<sup>29)</sup>」であろう。

道真の「法花寺白牡丹」の三、四句は、花の立場となって、「嫌ふは凡草に隨ひて種えらるること、好むは法華に向かひて看ること」と詠み、また結句には「清淨」とあり、白牡丹は清淨の仏地に非常に相応しい花だと讃美している。

寺院に牡丹を植えるのは、唐の習慣を踏まえていると考えられる。唐代の書物には、

#### 慈恩寺牡丹

〔唐・康駢『劇談錄』卷下〕

京国花卉之晨。尤以牡丹爲上。至佛宇道觀。遊覽者罕不經歷。

#### 京師尚牡丹

〔唐・李肇『國史補』卷中〕

長安貴遊尚牡丹。三十餘年矣。每春暮。車馬若狂。以不耽翫爲恥。金吾鋪官園外寺觀。種以求利。

などのように、当時の長安の寺院と牡丹との関連を記録したものがいくつもある。唐詩にも、次に挙げるいくつかの詩のように、詩題に〈寺名＋牡丹〉とあるだけでなく、詩句の中でも〈仏地に牡丹〉ということ詠み込んでいるものが多い。

和中丞慈恩寺清上人院牡丹花歌 權德輿

〔全唐詩〕卷三七

擢秀全勝珠樹林 秀を擢んで 全く珠樹林に勝る  
結根幸在青蓮域 根を結びて 幸ひ青蓮域に在り

西明寺牡丹

元稹

〔全唐詩〕卷四二

花向琉璃地上生 花は琉璃地上に生ひ

光風炫轉紫雲英 光風炫轉す 紫雲英

自從天女盤中見 天女の盤中に見しより

直至今朝眼更明 直だ今朝に至りて 眼更に明らかな

僧院牡丹 陳標

〔全唐詩〕卷五〇八

琉璃地上開紅艷 琉璃地上 紅艷開き

碧落天頭散曉霞 碧落天頭 曉霞散る

應是向西無地種 應に西に地の種うる無かるべし

不然爭肯重蓮花 然らざれば 争か肯へて蓮花を重ん

ぜん

杭州開元寺牡丹

張祜

〔全唐詩〕卷五一

風流卻是錢塘寺 風流なるは 却りて是れ錢塘寺

不踏紅塵見牡丹 紅塵を踏まずして牡丹を見る

元稹詩中の「光風炫轉紫雲英」や陳標詩中の「琉璃地上開紅艷」などのように、ここでもやはり紅牡丹や紫牡丹を詠んだ

ものが多い。「寺院に白牡丹」を詠むものは、晩唐呉融の「僧舍白牡丹二首」〔全唐詩〕卷六八六〕のみである。呉融の

没年（九〇一〜九〇四の間）は、道真の没年（九〇二）とほぼ同じであるために、道真に影響を与えたと考えるのには無理がある。このように、唐では、寺院に植えた牡丹を詠む詩において、白はやはり少数派であった。

道真の「法花寺白牡丹」詩の内容は、牡丹の詩よりも、白居易が江州に左遷された時に詠んだ次の詩と酷似する。

潯陽三題并序

廬山多桂樹、湓浦多修竹、東林寺有白蓮花、皆植物之貞勁秀異者、雖宮圍省寺中、未必能尽有。夫物以

多爲賤、故南方人不貴重之、至有蒸爨其桂、剪棄

其竹、白眼於蓮花者。予惜其不生于北土也、因

賦三題以唱之。

東林寺白蓮詩

〔白氏文集〕〇〇六三

東林北塘水 東林 北塘の水

湛湛見底清 湛湛として 底清きを見る

中生白芙蓉 中に白芙蓉生ひて

菡萏三百莖 菡萏 三百莖

白日發光彩 白日 光彩を發し

清飈散芳馨 清飈 芳馨を散ず

洩香銀囊破 香を洩して 銀囊破れ

瀉露玉盤傾 瀉を瀉ぎて 玉盤傾く

我慙塵垢眼 我は慙づ 塵垢の眼

見此瓊瑤英 此の瓊瑤の英を見ることを



乃知紅蓮花

虚得清淨名

夏萼敷未歇

秋房結纔成

夜深衆僧寢

獨起繞池行

欲收一顆子

寄向長安城

但恐出山去

人間種不生

乃ち知る 紅蓮花

虚しく清淨の名を得たるを

夏萼 敷いて未だ歇きず

秋房 結りて纔かに成る

夜深けて 衆僧寝たり

獨り起きて 池を繞りて行く

欲するは一顆の子を収め

長安城に寄せんこと

但だ恐るは 山を出で去りて

人間に種うも生えざらんこと

両者は、「法花寺白牡丹」Ⅱ「東林寺白蓮」という詩題の構造の類似、そして「清淨」「繞池」Ⅱ「繞叢」など、いくつかの表現の類似が見られるほか、道真詩の「嫌隨凡草種」と白詩の「但恐出山去、人間種不生」のように、両者は、ともに白い花の脱俗性に注目しており、特に、赴任先の仏寺で思いがけなく白花に出会って、そのあまりにも清淨で美しい姿に、はっと魅了され、心が洗われた、という趣旨が酷似している。両者に影響関係があることは明らかである。

仏教に対する関心の高まりによるものか、白居易の白蓮に対する愛情は、白牡丹などの他の白花より遙かに強い。この東林寺の白蓮との出会いがきっかけとなって、白蓮をこよなく愛するようになり、後に江南の白蓮を洛陽の自宅に移し植え、日々賞翫したのである。しかし、白居易はここでも、

「白牡丹」(○○三二)と同様に、序に世間が白蓮を冷たい目で見ることを述べている。しかも、「乃知紅蓮花 虚得清淨名」というように、自分もこの白蓮と出会うまでは世間と同じ考えであったと詠っている。つまり、「紅」との対比を通して、人にあまり好まれない「白」の清淨な美しさを詠っている。

道真は異なる。白居易の詩では、「白蓮」も「白牡丹」と同じように、紅色の花と比べれば価値の低いものとされるという世間一般の認識が詠み込まれているのに対して、道真は、それを問題にせず、直截に白い花を賛美しているのである。

以上、道真の白梅と白牡丹の詩を見てきた。特に注目すべきは、白居易の白牡丹・白蓮の詩を踏まえながらも、そこには、白詩に必ず出てくる、世間の白花輕視に対する批判や紅・紫の花が好まれることに関する措辞はまったく見られず、率直に白花に対する讚美を詠出しているものばかりだったことである。日本に唐と同じ認識が存在しなかったことを反映していると言えよう。

### 三 白菊

同じことは、白菊についても言える。

先に見てきたように、道真は概して白い花を好むのだが、特に、白菊に対する好尚が一層際だっている。道真と白菊については、冒頭に引用した幸田露伴の文をはじめ、先行研究

で触れられたことが多いが、ここでも一度その愛好ぶりを概観してみよう。

題「白菊花」

去春、天台明上人分寄種苗

『菅家文章』卷二・一二五

寒叢養得小儒家  
過雨宜看亞白沙

寒叢 小儒の家に養ひ得  
雨過ぎて看るに宜し 白沙に亞るる

本是天台山上種

本は是れ 天台山上の種

今爲吏部侍郎花

今は 吏部侍郎の花爲り

右の詩の題注に「去春天台明上人分寄種苗」とあるように、道真は、天台山（比叡山）の上人から白菊の種を譲り受け、自分の庭に植えていたことが分かる。天台の寺院でも、白菊が珍重されたのだろう。この天台ゆかりの白菊は、その後の道真の詩に何度も登場する。「題白菊花」（二二五）の次に配列されている次の詩は、

同諸才子九月三十日白菊叢邊命飲 同勒虚餘  
魚各加小序不<sub>レ</sub>過五十字

白菊生於我室虚

白菊 我室の虚に生ひ

殘秋一夕又閑餘

殘秋一夕 又閑餘なり

淺深淵醉花鰓下

淺く深く淵醉す 花の鰓の下

取樂何求在藻魚

樂を取るに何ぞ藻魚に在るを求めん

や

一句目「白菊生於我室虚」とあることから、この詩宴は、道真の自宅の庭に植えられた白菊を囲んで行われたと分かる。

また、自宅の庭を詠んだ次の、

夏日四絶・沙庭

『菅家文章』卷二・一八二

分合家中三逕斜

分合ひて 家中三逕斜めなるも

自慙明後滿庭沙

自ら慙づ 明るさの滿庭の沙に後れたるを

不須詩酒來喧聒

須<sub>レ</sub>ず詩酒來りて喧聒するを

爲是我開白菊華

是れ我れは白菊華を開かしむる爲なり

という詩でも、道真は、この白菊を誇りに思う氣持を詠み込んでいる。

讃岐守の時代に詠んだ「寄白菊四十韻」（『菅家文章』卷四・二六九）には、「予爲吏部侍郎之日、天台明公寄是花種」とあり、客居していても、京の自宅にある白菊に思いを寄せていたほどであった。

讃岐から帰京後も、「感白菊花、奉呈尚書平右丞」（『菅家文章』卷四・三三二）の詩に、「不見花來一二年」というように、自宅の白菊と別れた期間の思いを詠み、そして自注に「予爲博士、每年季秋、大學諸生、賞翫此花。」「到州三年、成五言韻詩、寄此花、以引客中之幽憤。」とあるように、この白菊にまつわる様々な思い出を綴っている。

太宰府に左遷された後も、

秋晚題「白菊」

〔菅家後集〕五〇五

涼秋月盡早霜初

涼秋 月盡きて 早霜の初め

殘菊白花雪不如

殘菊の白花 雪も如かず

老眼愁看何妄想

老眼愁へて看る 何をか妄想せん

王弘酒使便留居

王弘酒使 便ち留めて居らしめん

という詩を残している。この詩について、佐藤信一氏は「：

「妄想」も…「殘菊白花」の方にもかかるものではない

か。殘菊とすれば紅になるものではないだろうか。道真の

「眼」には実際の色はともかく、あるべき色として「白花」

でなければならなかったのではないか。」と指摘する。この

時、道真の脳裡には、きつと平安京宣風坊の自宅にあったあ

の白菊の姿が浮かんでいたに違いない。

道真は、前節でも引用した、白菊を詠んだ和歌も残してい

る。

おなじ御時せられける菊合に、洲浜をつくりて、菊

の花植ゑたりけるにくわへたる歌、吹上の浜のかた

に菊うゑたりけるに詠める

秋風の吹きあげにたてる白菊は花からぬか波の寄する

か

〔古今集〕秋下・二七二

これは宇多天皇が主催した所謂「寛平御時菊合」の際に、砂

浜に添えた歌である。白菊は、宮廷でも珍重されたのであろ

うか。

以上、道真の白菊を詠んだ詩歌を見てきた。次に、唐詩と

比べてみたい。「寄四十韻白菊」詩の冒頭部分では、「白菊園」のある平安京の自宅の立地や白菊の由緒などが詠まれている。

遠隔蒼波路

遠く隔つ 蒼波の路

遙思白菊園

遙かに思ふ 白菊の園

東京蝸舍宅

東京 蝸舎の宅

西向雀羅門

西に向かふ 雀羅の門

小壇斜富戸

小壇 斜めにして戸に當たり

疎欄正逼軒

疎欄 正に軒に逼まる

無池運本缺

池無ければ 運本より缺き

有畝竹逾繁

畝有りて 竹逾々繁し

擬擅孤叢美

孤叢の美を擅にせんと擬せば

先芸庶草蕃

先づ庶草の蕃きを芸れり

苗従台嶺得

苗は台嶺より得たり

種在侍郎存

種は侍郎に在りて存す

傍線部分では、白菊の「孤叢」の美を引き立てるために先ず周りの雑草を刈り取ったと詠んでおり、白菊への愛惜が窺える。「孤叢」という表現は、白居易の

重陽席上賦「白菊」白居易

滿園花菊鬱金黃 滿園の花菊 鬱金の黄

中有孤叢色似霜

中に孤叢有りて 色霜に似たり

還似今朝歌酒席

還た似たり 今朝の歌酒の席

白頭翁入少年場

白頭の翁 少年の場に入りしに

という詩を踏まえたものだと考えられるが、白居易の詩では、白菊は「満座の少年の中に、たった一人の白髪の老人―作者自身」に喩えられ、それは賛美される対象としてではなく、白居易が自分の初老の姿への自嘲を詠み込んだ、マイナスの効果を持つモチーフとなっていると言える。両者の白菊の「孤叢」に寄せた心情と趣は正反対なものであった。白居易の白菊を詠んだ詩は、この一首のみであり、彼は、白牡丹と同じように、白菊も好まなかったようである。

同じ白詩圏の詩人劉禹錫の「和令狐相公翫白菊」(『全唐詩』卷三六二)においても、

家家菊盡黃 家家菊盡こいつく黄なるに

梁國獨如霜 梁國獨り霜の如し

とあり、白居易の詩と同じように、白菊が黄菊と比べて稀な存在であることが詠まれている。詩題から分かるように、右の詩は「令狐相公」つまり、同じ白詩圏の詩人令狐楚に唱和したものであるが、劉禹錫には、同じ令狐楚と白菊に関する詩がもう一首ある。

酬令狐相公庭前白菊花謝偶書所懷見寄 劉禹錫

(『全唐詩』卷三五八)

數叢如雪色 數叢 雪色の如し

一旦冒霜開 一旦 霜を冒して開く

寒蕊差池落 寒蕊 差池として落ち

清香斷續來 清香 斷續として来る

この詩の題によれば、令狐楚の邸宅の庭先に白菊が植えられていたことが分かる。また、

和汴州令狐相公白菊 楊巨源

(『全唐詩』卷八八三・補遺二)

兔園春欲盡 兔園 春盡きんと欲し

別有一叢芳 別に一叢の芳有り

直似窮陰雪 直だ似たるは 窮陰の雪

全輕向曉霜 全く輕んずるは 向曉の霜

という楊巨源の一首は、劉禹錫の一首目と同題であり、ともに令狐楚の詩に和したものである。令狐楚の原詩は『全唐詩』に収められていないが、以上の数首を見れば、令狐楚は白菊の愛好家であったことが明らかである。

ところが、劉禹錫の詩に「家家菊盡黃、梁國獨如霜」とあるように、令狐楚のように白菊を好む人は、ごく少数であったようである。後に徐鉉が令狐楚の曾孫に贈った次の詩にも、

贈泰州掾令狐克己 (文公曾孫) (『全唐詩』卷七五四)

孤芳自愛凌霜處 孤芳自ら愛む 霜を凌ぐ處

詠取文公白菊詩 文公の白菊詩を詠取す

とあり、白菊を好む令狐楚が「孤芳自愛」つまり一般の人と異なる趣味の持ち主だと印象づけられていた。

いづれにせよ、唐では、白菊は白牡丹と同じように、世間では冷遇されたようである。次の、

白菊 許棠

(『全唐詩』卷六〇四)

發在林彫後

發くは 林の彫ばむ後に在り

繁當露冷時

繁けるは 露冷やかなる時に當たる

人間稀有此

人間に稀に此れ有り

自古乃無詩

古より乃ち詩無し

という詩にも詠まれてるように、白菊を賛美する作品は、ごく少ない。そして、白菊の愛好家も、令狐楚のほかに、晩唐の陸龜蒙しかないようである。

以上の唐の状況と比べれば、道真の白菊に対する好尚は一層格別に思われる。白花の中で白菊を最も愛するのは、令狐楚など唐では少数派であった詩人から影響を受けたと考えられないこともないが、それよりも、日本独特の白色好尚の伝統の中で培った感性によるものであったと考えたほうが自然ではないか。先の道真の詩歌の中にも、白菊は宮中や天台寺院に珍重されていた事実が認められる。『古今和歌集』の菊も白菊であった。

唐において白菊より黄菊のほうが好まれる理由はまず、言うまでもなく『漢書』『律曆志』に、

黄者、中之色、君之服也。

(卷二十一)

とあるように、黄色は国土の色であり、天子の服色であり、最も高貴な色だからであろう。そして、唐で白菊が好まれるのに対して、日本では白菊をより好んでいた理由を、もう一つ指摘できる。先に挙げた許棠の「發在林彫後 繁當露冷時」や、次の、

和 陸魯望白菊 司馬都

(『全唐詩』卷六〇〇)

恥共金英一例開

恥づ 金英と共に一例に開くを

素芳須待早霜催

素芳 須く待つべし 早霜の催すを

などであるように、白菊は黄菊と比べて開花期がだいぶ遅れるようである。およそ白菊は重陽節にはまだ咲かないであろう。中国では、重陽の日に菊を賞翫する習慣があり、重陽を過ぎた翌日になれば、菊は「残菊」と称され、賞翫の対象から外れる。重陽に咲くのに間に合わない白菊が冷遇されるのも無理はない。これに対して日本では、重陽と菊花の結び付きが唐ほど緊密ではなかった。それどころか、日本独創の「惜秋」という言葉が象徴するように、秋が暮れば暮れるほど、「残菊」を賞翫するのであった。故に遅く咲く白菊がより好まれたのであろう。道真の「残菊」と唐の「残菊」の相違については、別稿を用意している。

#### 四 結び

以上、菅原道真の白い花を詠む作品について考察した。これらの作品と唐詩を比較することによって、道真は、唐ではあまり好まれなかった白牡丹や白菊などの白い花を、非常に好んでいたことが明らかとなった。特に、道真は白居易の詩の表現を取り入れながらも、白詩に表れる唐における白色劣位の傾向とは反対に、白色優位の志向を持っていることが明らかとなった。これは、個人の好みもあるだろうが、それよ

りは、比喩表現に白いモチーフが多用されることとともに、主に日本独自の白色好尚の中で育った感性によったものであることは明らかと言えよう。

このように、日本漢詩を考える場合、中国の詩に典拠を求めることはともかくとして、そこに大いに存在する日本独特の要素も考慮しなければならない。

注

(1) 伊原昭「歌にあらわれた白色の優位について―上代の歌を中心に―」・同「白波」〔色彩と文学―古典和歌をしらべて―〕桜楓社、一九五九年十二月

(2) 長谷川哲夫「見立て」考（その2）（東洋大学『文学論漢』六四、一九九〇年二月）

(3) 和歌における「白いものの環」についての主な先行論考は、藤原克己「古今集歌の日本の特質と六朝・唐詩」〔『文学』五三一・一二、一九八五年十二月〕、鈴木宏子「雪と花の見立て」考〔『古今和歌集表現論』第一章、笠間書院、二〇〇〇年十二月、一九八七年初出〕、渡辺秀夫「白のイメージの環」〔『詩歌の森 日本語のイメージ』大修館書店、一九九五年五月〕などがある。

(4) 糸賀きみ江「雪月花―万葉・古今・新古今の美意識」〔『日本の美学』一〇、一九八七年五月〕。なお、宮地敦子「雪月花」の受容〔『国語と国文学』五一・八、一九七四年八月〕にも、同様の指摘が見られる。

(5) 拙稿「菅原道真の比喩表現と和歌―日中詩歌比較の視角から―」〔『和漢比較文学』三二・二、二〇〇四年二月〕

(6) 詳しくは、注(5)の拙稿で論じている。

(7) 注(5)参照。

(8) 幸田露伴「梅と菊と菅公と」〔『露伴全集』巻十九、岩波書店、一九五一年・一九一一年初出〕

(9) 「剪白綸」という表現は、中国六朝詩の「定須還翳綵、學作兩三枝」〔梁・簡文帝「雪裏覓梅花詩」〕や「翳綵作新梅」〔北周・宋慄「早春詩」〕などの「翳綵」（絹を切る）という表現を受容したと考えられるが、六朝の詩では、絹の色を詠んでいないのに対して、道真の詩は「白」の要素が入っている

(10) 「裂素」は、班婕妤の「新裂齊紈素、鮮潔如霜雪。裁爲合歡扇、團團似明月」〔怨詩〕という白紈扇を詠む詩の表現に由来するものであろう。ちなみに、この詩には「裁」という字もある。道真のもう一首にある「氷紵寸裁」も同じ発想によるものであろうか。

(11) 注(5)参照。

(12) 波戸岡旭「詠梅詩考」〔『宮廷詩人菅原道真―『菅家文章』・『菅家後集』の世界』笠間書院、二〇〇五年二月。一九九四年初出〕に拠る。

(13) 唐では、本稿で述べているように、牡丹・蓮・菊に関しては、「白」より「紅・紫」や「黄」をより好む傾向があるが、白梅に関しては、以上の傾向が見られない。白梅を詠む詩は、杜甫「雪樹元同色」〔江梅〕「全唐詩」卷三三二、韓愈「梅將雪共春、彩艷不相因」〔春雪間（一作映）早梅〕「全唐詩」卷三四三、許渾「素艷雪凝樹、清香風滿枝」〔聞薛先輩陪大夫看早梅因寄〕「全唐詩」卷五二九など、数多く見られる。韓愈の「春雪映早梅」という詩題は、道真の「早春侍宴仁壽殿同賦春雪映早梅應製」〔六

六)に取られている。

(14)『唐詩紀事』卷四十「張又新」に、「又新與楊虔州善、楊妻李、有德無容。又新求婚于楊曰、得美室足矣。楊曰、但與我同好、定諧君心。又新既成婚、殊失望、乃爲詩曰、牡丹一朵直千金、將謂從來色最深、今日滿欄開似雪、一生辜負看花心」とある。張又新は、楊氏の妻李氏が美徳の持ち主だと聞いて、楊氏に譲ってもらった。しかし、結婚したら、李氏の容貌が醜かったので、がっかりして白牡丹の詩を詠んだという。張又新の創作意図が本来そうだったかどうかはともかくとして、このようなエピソードが出ることは、唐では白牡丹が好まれない実態があるのを反映していると言える。

(15)白居易の「紅牡丹」を詠んだ詩は、「牡丹芳」(〇一五二)、「西明寺牡丹花時憶元九」(〇三九二)、「秋題牡丹叢」(〇四一五)、「惜牡丹花二首」(〇七四三、〇七四四)、「移牡丹栽」(二二九九)等である。

(16)白居易「白牡丹」などの詩における「白」の意義について、西村富美子「白居易における『白』に対する意識の二重構造―姓の『白』及び色彩の『白』」(『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』三三、二〇〇一年三月)では、「白居易の、色彩の『白』に対する意識は、白居易の姓である『白』と、色彩の『白』とを結び付けて、両者の『白』の持つ価値低きイメージに、価値高き評価を与えようとした、二重構造が隠されているのではないかと考えられる」と述べている。

(17)李樹桐「唐人喜愛牡丹考」(『唐史新論』台灣中華書局、一九七二年四月)(原文は中国語)。なお、金子修一「牡丹偏愛―中国牡丹狂時代」(『しにか』一九九七年九月号)も李氏の説を敷衍して

いる。

(18)日本では当時白色をもっとも尊貴の服色としたことについて、注(1)伊原昭氏の論文にすでに指摘されている。

(19)焼山廣志「道真の詩に投影された『白氏文集』―道真の『白氏文集』からの摂取態度の一考察―」(『国語国文学研究』(熊本大学)一四、一九七八年十二月)

(20)久保田淳「牡丹」(『古典歳時記 柳は緑花は紅』六三頁〜六九頁、小学館、一九八八年九月)

(21)白居易と白蓮花については、小松英生「白居易の花の詩(五)」(安田女子大学中国文学研究会『中国学論集』八、一九九四年七月)、埋田重夫「白居易詠花詩論序説―江州司馬以前を中心にして―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊(文学・芸術編)』一〇、一九八四年二月)、「白居易詠花詩論考―江州司馬以後を中心にして―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊(文学・芸術編)』一一、一九八五年一月)、「白居易における洛陽履道里邸の意義」(『中国文学研究』二九、二〇〇三年十二月)、平野顕照「中国古典文学と白蓮華」(『仏教大学文学部論集』八五、二〇〇一年三月)などに言及されている。

(22)道真と白菊花については、注(8)のほかに、本間洋一「菅原道真の菊の詩―王朝漢文学表現論考―」五七〜八四頁(和泉書院、二〇〇二年二月。一九八五年初出)、熊谷直春「菅原道真の庭」(『平安朝前期文学史の研究』桜楓社、一九九二年六月)、波戸岡旭「寄白菊四十韻」詩考」(『宮廷詩人菅原道真―「菅家文章」・「菅家後集」の世界』笠間書院、二〇〇五年二月。一九九六年初出)などの論文に言及されている。

(23)佐藤信一「菅原道真―悲劇の都落ち」(『国文学解釈と鑑賞』六

七二、二〇〇二年二月)

(24) 中国詩において、「孤叢」という表現は、管見によつては、白居易のこの一首しかない。道真の詩に「孤叢」は十例も数えられる。道真の詩における「孤叢」については、拙稿「菅原道真詩に見られる「孤叢」という表現をめぐって」(和漢比較文学学会編『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三年二月)において詳しく論じている。

(25) 白居易の詩には、「兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黃」(九日宴集醉題郡樓兼呈周殷二判官「二二〇〇」)や、「霜蓬鬢鬢三分白、露菊新花一半黃」(九月八日酬皇甫十見贈「三三八二」)などのように、黄色い菊花と白髪を自分を対照的に照らし合わせる例が多い。「重陽席上賦白菊」の詩も同じ発想によるものと言える。

(26) 本稿で取り上げた例も含め、『全唐詩』には、白菊を詠む詩は、わずか二七首である。中では、司空圖の「白菊雜書四首」(卷六三三)・「白菊三首」(卷六三四、二回計六首)と題する十首の絶句は、内容的には述懐詩であり、白菊を直接詠むものではない。

(27) 陸龜蒙には、「重憶白菊」(『全唐詩』卷六二四)・「幽居有白菊一叢因而成詠呈知己」(卷六二六)・「憶白菊」(卷六二八)などの詩を残している。また、皮日休「奉和魯望白菊」(『全唐詩』卷六一四)と鄭壁「奉和陸魯望白菊」(『全唐詩』卷六三二)など、陸龜蒙に和した詩もある。

(28) 古今集の白菊については、小林祥次郎「菊史(一)——古今集まで」(群馬県立女子大学『国文学研究』二二、二〇〇二年三月)に拠る。なお、渡辺秀夫「菊花のイメージ——日本と中国」(『しにか』一九九七年九月号)、深津胤房『中国文化と日本文化——黄菊と白菊』(自費出版、一九九七年四月)などの論考では、中国で

菊というと「黄菊」であるのに対し、日本の古典詩歌の世界では菊というと「白菊」であったことを述べている。

(29) 注(28) 渡辺氏論文、深津氏著書に拠る。

(30) 拙稿「菅原道真詩文における「残菊」をめぐって——日中比較の視角から——」(国際日本文化研究センター紀要『日本研究』三三、二〇〇六年三月)

付記

本稿は、平成十八年度大阪大学国語国文学絵会(二〇〇六年一月十四日於大阪大学)における口頭発表に基づく。

(こう・へいへい 本学大学院外国人招へい研究員)